

編集後記

今年度で「共生のひろば」も11年目を無事に終えることができました。当館の中核事業なので心の底からほっとしています。はじまりから10年が経過したこともあって、年度当初から会合の在り方が検討されていました。10月まで検討が続きましたが結論は従来どおりの形式は中止に。理由は、職員が忙しくなって研究や新しい業務開発ができない、高度化しすぎ、マンネリ化しているなど色々。さらに、昨年度から館の運営方針が変わり、個人がやりたい業務だけを担えばOKとする、プロジェクト方式と称される先進的な業務管理体制となったことで、担当不在が発生するなど、不幸にも色んな要因が重なりました。共生のひろばの段取り準備から、広報、まとめなど、時間がとられる仕事なので、近視眼的な発想に従えば、研究者なら誰も自発的に引き受けることはまず無いでしょう。そして、意思決定できない状況が長く続き、多くの方から「今年は開催するのか?」、「分析の方法を相談したい」、「今年は〇〇について発表したい」といったたくさんの方が寄せられました。標本を寄贈してくれている方、やる気満々のキッズ、1年前から準備されている親子、一緒に共同研究している方、有益な観察情報やアドバイスを頂ける方、セミナーを陰で助けてくれている方など、多くの市民科学者の方々によって当館の運営と自然史研究が支えられていることを再認識させられました。こうした過程のなかで、中止を再考する議論が再燃し、多くの研究員の参画のもとで新たに「共生のひろばプロジェクト」として位置づけ、広く一般に公募し、ポスター発表中心で交流を重視するスタイルでの再スタートとなりました。おかげで、過去最高の参加者、来館者数を記録するほどの盛況ぶりで、すでに来年度の発表に向けて準備しているとの声が各所から聞こえています。これが何よりの励みです。昨年度の編集後記には、「次年度以降は、より多くの方が参画できる共生のひろばになるよう、新たな展開を模索」と宣言されており、なんとかこの公約が実現できたことが今年最大の成果です。引き続き、ひとはくの「共生のひろば」への応援と参加、そして叱咤激励をよろしくお願いします。

(共生のひろばプロジェクト代表 三橋弘宗)